

ペスタロッチの学園における子どもの唱歌活動と唱歌教育 ——イヴェルドンの学園で編集された『歌集』(1811)の分析を通して——

関口博子*

はじめに

ペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) は、『幼児教育の書簡』(Letters on early education, 1827) などにおいて保育に関するさまざまな有益な示唆を与えており、同書の第23信では、保育における音楽の重要性にも言及している¹⁾。スイスのチューリッヒを拠点に活躍していたペスタロッチ主義の音楽教育家のネーゲリ (Hans Georg Nägeli, 1773-1836) と、ペスタロッチのもとで2年間そのメトードを学んだ唱歌教師のプファイファー (Michael Traugott Pfeiffer, 1771-1849) が、『ペスタロッチの原理による唱歌教育論』(Gesangbildungslehre nach Pestalozzischen Grundsätzen, 1810) ——以下、『唱歌教育論』と略称——を著し、それが後の学校音楽教育に多大な影響を及ぼしたことは、周知の通りである。

しかし、ペスタロッチの学園でどのような唱歌活動が行われ、実際にどのような歌が歌われていたのかということは、これまでほとんど明らかにされてこなかった。もちろん、資料的な制約もあり、そのすべてを明らかにすることはきわめて困難であると言わざるを得ないが、本稿では、彼のイヴェルドンの学園で編集され、1811年に発行された『歌集』(Lieder, 1811) に焦点を当て、その内容を分析することを通して、ペスタロッチの

学園における子どもの唱歌活動の一端を明らかにすることを試みたい。そして、ペスタロッチの学園における唱歌の実践に、彼の音楽や唱歌教育に対する考え方がどのように反映されていたのかについて考察することを、本稿の課題とする。具体的には、まず、『歌集』編集以前のペスタロッチの学園における唱歌活動および唱歌教育について、ノイホーフ、ブルクドルフ時代からさかのぼって再検討する。その上で、イヴェルドンの学園で編集された『歌集』の構成およびその概要を踏まえ、『歌集』所収曲の内容について、特に歌詞と歌の形態を中心に分析する。そして、ペスタロッチの音楽や唱歌教育に対する考え方が、『歌集』にどのように反映されていたのかを明らかにすることを通して、上記の課題に迫りたい。

1. 『歌集』(1811) 編集以前のペスタロッチの学園における唱歌活動と唱歌教育

(1) ノイホーフ、ブルクドルフの学園における唱歌活動と唱歌教育

ペスタロッチは、ノイホーフ (Neuhof) で貧民学校を運営していた1775年に、自身の生徒達のためにラファーター (Johann Kasper Lavater) 作詞の『スイスの歌』(Die Schweizerlieder) を取り寄せている。このラファーターの歌は、ブルクドルフの学園でもたびたび歌われていたことが、学園に滞在していた者の次の報告から明らかになる。

「教師と生徒とは、ときどき城の入り口に集

*〒380-8525 長野市三輪8-49-7 長野県短期大学
*Nagano Prefectural College, 8-49-7 Miwa,
Nagano 380-8525, Japan.

まって軍事教練を行い、それが済むとラフターターの歌から何曲か歌った。その歌は、スイスの自然を賛美するもの、祖先を敬うもの、牧人の生活の素朴さやスイス人の気質を歌ったものなどであった。私は、これらの歌をブルクドルフの子ども達が歌うのをたびたび聴いた。』³⁾

ブルクドルフ時代には、まだネーグリのような音楽の専門家はペスタロッチの協力者として学園の唱歌教育に加わっておらず、学園の教師達が他の教科の合間や放課後に子ども達に歌を歌わせていたようである。ブルクドルフにおける唱歌教育については、次のような報告がある。

「放課後、彼ら [子ども達——引用者] は3人ずつ組んで城の入り口に整列し、1, 2, 1, 2と拍子に合わせて行進する。それが唱歌教授の最初であった。まもなく彼らは、この拍子に合わせて歌い始める。彼らは、行進によって拍子を会得したのであった。』⁴⁾

このようにブルクドルフ時代までのペスタロッチの学園における唱歌教育は、拍子に合わせてみんなで一緒に屋外で歌うなど、学園生活を楽しく豊かにし、子ども達相互の結びつきを深めるためにのみ行われていたと言える。

(2) 初期のイヴェルドンの学園における唱歌活動と唱歌教育

ペスタロッチは、1804年にイヴェルドンに学園を興し、以後20年間、この地に滞在することになる。『歌集』が発行される前年の1810年は、ネーグリとプファイファーによる『唱歌教育論』が出版された年であり、『歌集』は、ペスタロッチ主義による唱歌教育の方法が確立し、学園での唱歌教育が最も充実していた時期に発行されたと言え

る。

『歌集』が発行される以前のイヴェルドンの学園における唱歌教育の実際については、1809年11月に代表者会議 (Tagsatzung)⁵⁾の議員が、イヴェルドンの学園を訪問した際の報告のなかに見出だすことができる。その報告では、唱歌教育について次のように述べられている。

「最初の練習は、声と聴覚の育成に関することである。それらの練習によって、音楽的な才能が現れるであろう。子ども達は、彼らに示されたいくつかの単純な音を復唱する。子ども達に、音の高さや強さに気を配らせて、音の違いに気づかせる。彼らが歌を好きになるように、簡単なメロディーを与える。その際の音程と歌詞は、幼い子どもにふさわしく、好かれるものである。このような練習の後で、ネーグリが規定した実際の方法へと進むのである。』⁶⁾

上の報告から、『歌集』が発行される少し前のイヴェルドンの学園では、1810年発行の『唱歌教育論』で完成することとなるネーグリの唱歌教育の方法⁷⁾が適用されていたということとともに、ネーグリの方法へと進む前提として、別のやり方も併用されていたことが明らかになる。ネーグリ以外の方法とは、リントナー (Friedrich Wilhelm Lindner) によるものであると考えられる。リントナーは、ライプツィヒの市民学校の教師である。彼は、ペスタロッチの直接的な協力者ではなかったが、1806年にペスタロッチに宛てた書簡がもととなり、彼の唱歌教育の方法が、イヴェルドンの学園でネーグリの方法とともに用いられていたとされている⁸⁾。実際に上の報告にみられる方法は、リントナーが『一般音楽新聞』 (Allgemeine musikalische Zeitung) 誌上に発表した方法と酷似している⁹⁾。

以上のことから明らかな通り、イヴェルドンに学園が移ってからは、ブルクドルフ時代のような学園生活を楽しく豊かにし、子ども達相互の結びつきを深めるために歌を歌うだけではなく、徐々に系統だった唱歌教育も行われるようになってきたと言えるであろう。

2. 『歌集』(1811)の構成とその概要

では、そうした系統だった唱歌教育も行われるようになったイヴェルドンの学園において、1811年に発行された『歌集』はどのような役割を担っていたのであろうか。そのことを明らかにするためには、『歌集』の内容を詳細に分析し、その特質を明らかにしなければならない。ここではまず、『歌集』の構成とその概要を踏まえたい。

この『歌集』には、そのタイトルに「イヴェルドンの学園での使用のために、そして学園の要求にしたがって集められた」(Gesammelt zum Gebrauche und nach dem Bedürfnisse der Anstalt zu Yferten)とはっきり明記されている。よってこの『歌集』は、学園で実際に用いるために編集されたものであると言える。そこには、全部で94曲が収録されているが、そのうちの1番から65番が年長向きの、66番から94番が小さな子どものための歌となっている¹⁰⁾。

『歌集』は、以下の5人の作曲者による6つの曲集から集められた歌を中心に構成されている。

- ① Nägeli : Beilagen zur Gesanglehre.
- ② Nägeli : Teutonia.
- ③ Lindner : Der musikalische Jugendfreund.
- ④ Mildheimer : Liederbuch.
- ⑤ Engelmann :
Der musikalische Kinderfreund.
- ⑥ Harder :
Lieder zu Krummacher's "Sonntag".

①は、1810年発行の前述の『唱歌教育論』付録のネーグリ作曲による唱歌集である。『唱歌教育論』には、単声、2声、3声各30曲、計90曲のネーグリ作曲による唱歌が付録として付いている。この『歌集』には、本稿末の〈資料〉から明らかな通り、『唱歌教育論』付録の唱歌集から7曲が収められている。それらはすべて2声唱歌である。8小節のものが2曲、12小節のものが4曲、16小節のものが1曲と、いずれも短いアカペラの曲ばかりであり、 $\frac{6}{8}$ 拍子3曲、 $\frac{2}{4}$ 拍子2曲、 $\frac{3}{8}$ 拍子と $\frac{4}{4}$ 拍子がそれぞれ1曲ずつの、すべて調号4つまでの長調である。音域は、c¹は子どもにとって低すぎるとい理由から¹¹⁾、最低音がes¹となっており、最高音はg²である。

②の『トイトーニア』(Teutonia)は、1808年に出版が開始されたネーグリ作曲による全12巻からなるルントゲザング Rundgesang¹²⁾の曲集のシリーズで、彼が生涯に作曲した100曲を超えるルントゲザングのうち、72曲がこのシリーズに収められている。またこの『トイトーニア』は、最初に発行された2巻をベスタロッチのもとに送ったことから両者の交流が始まったとされているものである。実際にベスタロッチは、この曲集の送付に対して、「私の生徒達は、あなたからいただいた曲をかなり上手に歌っています」¹³⁾という内容の礼状を1808年10月18日付でネーグリに送っている。ベスタロッチは、この『トイトーニア』をとっても気に入ったらしく、同礼状にてさらに、発行されたばかりの第3巻の送付を含め、全部で16部の注文を行っている¹⁴⁾。また彼は、知人に対してもこの曲集の紹介を行い¹⁵⁾、その普及に助力している。実際に『歌集』に取り上げられたのは、『歌集』の発行が1811年ということもあり、それ以前に発行された『トイトーニア』の第4巻までに収められている曲(第1巻より2曲、第3巻より2曲、第4巻より1曲)である。それらの曲は、C-dur 2曲、F-dur、D-dur、A-durそれぞれ1

〈表1〉『歌集』(1811) 所収曲の歌詞の内容

	自然	愛国	宗教	労働	道徳	喜び	人生	その他
年長向き (1~65番)	23曲 [35.38%]	12曲 18.46%	11曲 16.92%	1曲 1.54%	2曲 3.08%	6曲 9.23%	4曲 6.15%	6曲 9.23%
年少向き (66~94番)	10曲 [34.48%]		1曲 3.45%	8曲 27.59%	5曲 17.24%	1曲 3.45%		4曲 13.79%
合計 (1~94番)	33曲 [35.11%]	12曲 12.77%	12曲 12.77%	9曲 9.57%	7曲 7.45%	7曲 7.45%	4曲 4.26%	10曲 10.64%

* [] 内のパーセンテージは、少数点3桁以下四捨五入。
(したがって、必ずしも合計が完全に100%にはならない)

曲ずつと、いずれも調号3つまでの長調であり、その長さも1曲以外は20小節前後という『トイトーニア』のなかでは比較的簡単で短い曲が選ばれている。

③の曲集は、先述のリントナー作曲による唱歌集である。④から⑥の作曲者についての詳細は不明であるが、歌詞の内容などから推察すれば、おそらくは同時代のスイスの作曲家や音楽教育家であったと思われる。

なお、この『歌集』では、全94曲中40曲(全体の42.55%)が作曲者不詳の歌となっている。その割合は、年長向きの歌では65曲中18曲(27.69%)なのに対して、年少向きの歌では29曲中22曲(75.86%)であり、特に年少向きの歌に作曲者不詳の歌が多くなっている。

3. 『歌集』(1811) の内容分析

(1) 歌詞の内容の分析

筆者は、この『歌集』に収録されている全94曲の歌詞の内容を個々に分析し、年長向きの歌と年少向きの歌とに分けて歌詞の内容の分類を試みた。その結果が、〈表1〉である。

この表から明らかな通り、年長、年少ともに、自然を歌った歌が最も多いことがうかがえる。自然を歌った歌とは、自然の情景を歌ったものや自然を賛美する歌などである。直接、「スイス」や「祖国」といった言葉が歌詞のなかに現れている

ものは少ないが、「アルプ」「山」「谷」など、スイスの自然を連想させる言葉が多く含まれ、スイスの自然の素晴らしさを歌った歌が多い。

自然を歌った歌以外については、年長と年少とで相違がみられる。年長向きの歌では、自然の歌に次いで愛国的な内容や宗教的な歌詞を持つものが多い。愛国的な歌詞を持つ歌とは、「祖国万歳!」や「祖国のために」など、直接的に愛国心を鼓舞するような歌とともに、「兄弟達よ!」と呼び掛け、同胞人としての結束を促すような歌も含まれている。宗教的な歌詞を持つ歌とは、神をたたえる歌、神への感謝を捧げる歌などである。その他、年長向きの歌では、喜びや祝福の歌、人生の在り方を歌った歌なども数曲みられる。

一方、年少向きの歌には、愛国的な内容や宗教的な歌詞を持つものはほとんどなく、代わりに労働に関する歌や道徳的な歌詞を持つ歌が多くなっている。労働に関する歌全9曲(年長向け1曲含む)の内訳は、狩人の歌4曲、牧人の歌3曲、草刈り人の歌1曲、海の男の歌1曲となっている。このことから明らかな通り、海の男以外の狩人や牧人、草刈り人は、いずれもスイスの子ども達にとってとても身近な存在である。そうした身近な狩人や牧人の仕事ぶりを歌った歌が、狩人の歌、牧人の歌などである。道徳的な歌詞とは、身近な題材を通していいことと悪いことの区別や年長者への敬意を養おうとするような内容のものである。

〈表2〉『歌集』(1811) 所収曲の形態

	有節歌曲	Rundgesang	その他
年長向き (1~65番)	54曲[83.08%]	11曲[16.92%]	
年少向き (66~94番)	28曲[96.55%]		1曲[3.45%]
合計 (1~94番)	82曲[87.23%]	11曲[11.70%]	1曲[1.06%]

* [] 内のパーセンテージは、少数点3桁以下四捨五入。
(したがって、必ずしも合計が完全に100%にはならない)

なお、年少向きの歌には、スイス方言の歌詞を持つ歌が4曲(74・75・76・81番)含まれている。いずれも作曲者不詳の歌であるが、スイス独特の言葉や言い回しを使って身近なスイスの日常を歌っている。

ところでこの『歌集』には、もとの歌のメロディーに違う歌詞を付けた、いわゆる替え歌も2曲含まれている(16番=4番の替え歌・59番=33番の替え歌)。歌詞は、「その内容が子ども達にとってふさわしくない場合のみ変更した」¹⁶⁾としており、原則的には、原曲の歌詞を尊重してそのまま用いていると言える。

(2) 歌の形態の分析

この『歌集』に含まれている歌は、1曲を除き、有節歌曲またはルントゲザングのいずれかとなっている。ルントゲザングも形式的には有節歌曲の一種であるが、ソロ(重唱)を含むことから、ここでは斉唱または合唱のみの普通の有節歌曲の形

式とは分けて考えた。そして、年長向きの歌と年少向きの歌にどのくらいの割合で有節歌曲とルントゲザングが収められているのかを表したのが、〈表2〉である。

〈表2〉から明らかな通り、ルントゲザングは、年少向きの歌には1曲も含まれていない。ソロ(重唱)を含むという形態から、ルントゲザングは、やはりある程度の年齢以上にならなければ歌うことのできないものであるという事実を裏付けていると言えよう。

また『歌集』の序文には、「歌詞については1節だけかあるいは2~3節でできている」¹⁷⁾と書かれているが、『歌集』に収められている歌が実際に何節から成り立っているのかということを示したのが、〈表3〉である。そこから明らかな通り、年長向きの歌では、4節が最も多くて年長向きの歌の約4分の1にあたる16曲、次いで3節が4節より1曲少ない15曲、6節が12曲となっている。年少向きの歌では、2節が最も多くてやはり

〈表3〉『歌集』(1811) 所収曲の節数

節数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10~
年長向き (1~65番)		2曲	15曲	16曲	8曲	12曲	4曲	4曲	2曲	2曲
	[3.08%	23.08%	24.62%	12.31%	18.46%	6.15%	6.15%	3.08%	3.08%
年少向き (66~94番)	4曲	7曲	4曲	3曲	3曲	4曲			2曲	2曲
	[13.79%	24.14%	13.79%	10.34%	10.34%	13.79%			6.90%	6.90%
合計 (1~94番)	4曲	9曲	19曲	19曲	11曲	16曲	4曲	4曲	4曲	4曲
	[4.26%	9.57%	20.21%	20.21%	11.70%	17.02%	4.26%	4.26%	4.26%	4.26%

* [] 内のパーセンテージは、少数点3桁以下四捨五入。
(したがって、必ずしも合計が完全に100%にはならない)

年少向きの歌の約4分の1にあたる7曲、ついで1節、3節、6節がそれぞれ4曲ずつとなっており、年長向きの歌のほうが年少向きの歌よりも平均して2節程度長くなっていることがうかがえる。全体的には、3節と4節がそれぞれ19曲でもっとも多くなっており、序文で書かれている2～3節よりはやや長いものの、概して単純な構成の曲が多いと言えるであろう。

4. 『歌集』(1811) の特質

『歌集』の序文には、そこに収録された歌について次のように述べられている。

「ここに集められた歌は、自由な集いで、野外で、山で、庭で、湖畔で歌うためのものである。それらの歌は、集いの楽しさや、今は純粋な心からの一致を、そして将来には友好の思い出をもたらすのである。」¹⁸⁾

なかでも『歌集』に収められた『トイトーニア』については、特別に取り上げて次のように述べている。

「私達が唱歌の時間に楽譜を見ながらよく歌っていたネーグリのトイトーニアからのレントゲザングと他の何曲かは、皆にとっても好まれていたので、大切な思い出として受け入れられるものである。」¹⁹⁾

前述の通り、ネーグリの『トイトーニア』は、ペスタロッチとネーグリとを結び付ける契機となつた曲集であり、ネーグリがペスタロッチの直接的な協力者となる前の1808年の段階で、すでにペスタロッチが子ども達に歌わせていたことを表明しているものである。この『トイトーニア』からの歌も含めて『歌集』に収められた歌の「メロディーは、すでに長いこと学園に根づいているもの

であり、よく知られたものである」²⁰⁾ということであるから、作曲者不詳の歌も含め、すべての歌が、イヴェルドンの子ども達にとってはすでに知っている歌であったとみられる。すなわちこの『歌集』は、すでにかなり以前から学園のさまざまな集いや野外で歌われていた単純な短い歌を一冊にまとめたものであると考えてよいであろう。

以上のことから明らかな通り、イヴェルドンの学園において『歌集』に求められた役割は、それを系統だった唱歌の基礎教授に役立てるということではない。『歌集』の役割は、唱歌の時間に培った基礎能力に基づいて、山や湖畔などの野外に行つたとき²¹⁾やさまざまな集いでみんなで一緒に歌うことを通して、子ども達相互の結び付きを深めるといふところにあったと言えるであろう。

考察——『歌集』(1811) にみる

ペスタロッチの教育理念——

さて、これまでさまざまな観点から『歌集』の内容を分析し、その特質について考察してきた。では、実際にこの『歌集』にペスタロッチの教育理念はどのように反映されているのであろうか。

ペスタロッチは、『幼児教育の書簡』のなかで、「音楽の教育的効用は、国民感情を高揚させることである」²²⁾と述べている。『歌集』には、実際に特に年長向きのものにはっきりと愛国を歌った歌が多くみられる。年少向きの歌にはっきりと愛国を歌った歌は少ないが、『歌集』全体を通して最も多い自然を歌った歌というのが、先述の通り実際には、その多くがスイスの自然の素晴らしさを歌ったものである。スイスの自然を賛美する歌、愛国的な内容の歌の数の多さから、『歌集』では、全体を通じて祖国愛を培うことが最も大きなテーマになっていると言える。スイスの自然を賛美する歌を幼少の頃からたびたび歌う機会を設けることで、子ども達にごく自然に祖国を愛する気持ちを芽生えさせたいというペスタロッチの意図を汲

み取ることができるであろう。

またペスタロッチは、同じく『幼児教育の書簡』のなかで、「音楽は道德教育に有効である」²³⁾とも述べている。〈表1〉から明らかな通り、『歌集』では、道徳的な歌詞を持つ歌が年少向きの歌で3番目に多くなっている。年長向きの歌には道徳的な歌詞の歌は少ないが、代わりに宗教的な内容のものが3番目に多くなっている。道徳的な歌と宗教的な歌とは、子どもの発達段階に則した教育を唱えるペスタロッチの教育理念に鑑みれば、まったく別個のものとはとらえがたい。すなわち、まず幼少のうちに子ども達の身近な題材を通して人としての道徳を培い、ある程度の年齢になってから神への感謝を内容とする宗教的な歌を歌わせるという、道徳的な内容から宗教的な内容へとつながるものであると解釈するほうが自然であろう。子ども達が日常的に使っているスイス方言の歌詞の歌が年少向きの歌に含まれていることも、子どもの発達段階に則した教育を唱えるペスタロッチの教育理念に合致していると言えよう。

ところでペスタロッチの『リーन्हアルトとゲルトルート』(Lienhard und Gertrud, 1781-1787)には、民衆が仕事に行きながら、あるいは仕事をしながら歌を歌う場面が描かれている²⁴⁾。『歌集』にも、牧人や狩人が仕事の合間や行き帰りに、あるいは仕事をしながら歌うような労働歌が、特に年少向けの歌に多く収録されているが、『歌集』に含まれる牧人や狩人の歌は、『リーन्हアルトとゲルトルート』の第3部第25章の次の場面を連想させるものである。

「彼〔羊飼いの少年——引用者〕は、彼ら〔城主アーネルとその同行者の中尉——引用者〕の足もとに立ち止まり、太陽のほうを向いて牧杖によりかかって夕べの歌を歌った。それは美そのものであった…(後略)…」²⁵⁾

また、『リーन्हアルトとゲルトルート』では、労働歌以外でも、教会での礼拝、家庭、食事の席など、日常のさまざまな場面で歌が登場しており、歌が民衆の生活にきわめて密接に関わるものとして描かれている。この『歌集』の、特に年少向きの歌にスイス人にとって身近な牧人や狩人の歌が含まれ、スイスの身近な日常が歌われていることも、幼少の頃から人間の日常に密接に関わる重要なものとして歌をとらえていたペスタロッチの音楽教育観に合致するものである。

以上の考察から、この『歌集』は、1810年頃までのペスタロッチの学園における子どもの唱歌活動をいわば集約したものであると同時に、それはまた、祖国愛や道德教育にとって、あるいは人間相互の結び付きを深め、人々の日常に欠かせない重要なものとして歌をとらえていたペスタロッチの音楽や唱歌教育に対する考え方を大きく反映させたものでもあると言ってよいであろう。

今後は、ペスタロッチの学園以外の一般のスイスの学校における唱歌活動や唱歌教育に、ペスタロッチの音楽や唱歌教育に対する考え方がどの程度浸透したのかを探るとともに、ペスタロッチ主義音楽教育としてドイツやスイスに普及したペスタロッチのメトードを基礎とする唱歌教育の方法が、どのような変容をたどり、理念的にも変化していったのかということを明らかにしていきたい。

註および引用文献

- 1) Pestalozzi, Johann Heinrich: *Letters on early education* (以下、この文献は *Letters* と略称)。In: *Bibliographie über Pestalozzi*, Bd. II, S. 96-97.
- 2) 筆者は、以下の拙稿において、ペスタロッチの音楽や唱歌教育に対する考え方、また、ペスタロッチの学園における唱歌活動や唱歌教育についても一部、取り上げている。拙稿「H. G. ネーグリにおけるペスタロッチ主義音楽教育の特質——ペスタロッチの音楽教育

- 観との比較検討を通して——』『学校教育学研究論集』（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科）第3号，2000年3月，1—10頁（特に「1. ベスタロッチと音楽教育」2—4頁参照）。
- 3) Morf, Heinrich: *Zur Biographie Pestalozzi's*. Bd.2, Osnachbrück, 1966 [1885¹], S.201.
- 4) Ebenda, Bd.1, S.298.
- 5) 19世紀初頭のスイスでは，フランスの影響下にあった中央集権的な「ヘルヴェティア共和国」が崩壊し，1803年のナポレオンの調停条約によってふたたび伝統的な各カントンによる自治が復活した。代表者会議とは，このナポレオンの調停条約によって生じたもので，その名の通り，各カントンの代表者達によって構成される会議のことである。チューリッヒ，ベルン，ルツェルンの各カントンが交替で議長を受け持った。代表者会議は，外交政策についてのみ権限を有し，各カントンの政治に関与することはできなかった。代表者会議は，連邦国家が成立した1848年まで存続した。
- 参照：ジリヤール，シャルル『スイス史』江口清訳 白水社，1987年，84—85，117—119頁。
- 6) Schipke, Max: *Der deutsche Schulgesang von Johann Adam Hiller bis zu den Falkschen Allgemeinen Bestimmungen*. Berlin: Union Deutsche Verlagsgesellschaft, 1913, S.110.
- 7) 本稿は，『唱歌教育論』の内容やネーゲリの唱歌教育の方法について分析することが目的ではないので，ここではそのことには触れないが，以下の拙稿で，『唱歌教育論』と後に出された『学校唱歌集』とを比較することによってネーゲリの唱歌教育の方法の特質について考察しているので，そちらを参照されたい。なお，『唱歌教育論』の全体構成と概要についても，同稿の14頁にまとめている。
- 参照：拙稿「19世紀前期カントン・チューリッヒ（スイス）の学校教育におけるベスタロッチ主義音楽教育の受容——H. G. ネーゲリ『学校唱歌集』（1833）の分析を通して——」『音楽教育学』（日本音楽教育学会）第29巻第1号，1999年，1—16頁。
- 8) Weber, Johann Rudolf: *Theoretisch-praktische Gesanglehre*. 1. Heft, Bern/Zürich, 1849, S.79—80.
- 9) Vgl. Lindner, Friedrich Wilhelm: *Ueber den Gesang in der Bürgerschule zu Leipzig*. In: Allgemeine musikalische Zeitung (以下，この文献はAmZと略称)，1805, Sp. 147-158, 161-171.
- なお筆者は，リントナーの唱歌教育の方法について，以下の拙稿の一部でより詳細に取り上げている。
- 拙稿「19世紀初頭のドイツにおけるベスタロッチ主義音楽教育の受容」『長野県短期大学紀要』第55号，2000年，71—81頁（特に，72—73頁参照）。
- 10) *Lieder. Gesammelt zum Gebrauche und nach dem Bedürfnisse der Anstalt zu Yferten* (以下，この文献は *Lieder* と略称)。Yferten: Gedruckt und verlegt im Institut, 1811, 序文。
- なお『歌集』では，何歳までを年少とし，何歳以上を年長とするのかという具体的な年齢の分け方についてはいっさい言及されていない。だが，ネーゲリ&プファイファーの『唱歌教育論』ではその適用年齢が10歳と定められており(Nägeli, Hans Georg & Pfeiffer, Michael Traugott: *Gesangbildungslehre nach Pestalozzischen Grundsätzen*. Zürich, 1810, S.8)，同書の付録の唱歌集が年少向けの歌に1曲も含まれていないということと歌詞の内容からみて，10歳前後で年長と年少とが分けられるとみるのが妥当である。
- 11) ネーゲリは，c¹は生理学的にみて子どもには低すぎると述べている。
- Nägeli: *Die Pestalozzische Gesangbildungslehre nach Pfeiffers Erfindung kunstwissenschaftlich dargestellt im Namen Pestalozzis, Pfeiffers und ihrer Freunde*. In: AmZ, 1809, Sp.810.
- 12) Rundgesangとは，有節歌曲の詩節の部分をつら（ソリ）が，リフレインを合唱が受け持ち，両者が交互に歌うという形態のものである。
- Vgl. Engel, Hans: *Rondeau-Rondo*. In: Die Musik in Geschichte und Gegenwart, Bd. 11, Sp.876.

このような形態を表すふさわしい訳語がないため、そのままルントゲザングとした。

なおネーゲリは、ルントゲザングを意識的に広義に解釈し、ソロの部分に重唱を置いた曲を多数作曲している。ちなみに、『トイトーニア』全72曲中じつに半数以上の42曲に重唱が含まれている。

Vgl. Nägeli: *Teutonia*. 12 Bde., Zürich, 1808-?.

- 13) Pestalozzi, Johann Heinrich: *Sämtliche Briefe* (以下、この文献は *Briefe* と略称). Bd.6, S.98.
- 14) Ebenda.
- 15) 1809年から1811年までの数通の書簡においてペスタロッチは、自身の紹介による『トイトーニア』の購入希望者の名前をネーゲリに書き送っている。
Vgl. Pestalozzi: *Briefe*, Bd.6-7.
- 16) *Lieder*, 序文。
- 17) Ebenda.
- 18) Ebenda.
- 19) Ebenda.
- 20) Ebenda.

21) 野外、特に山や湖畔で歌うということを考慮してか、現在チューリッヒのペスタロッチアヌム (Pestalozzianum) に所蔵されているこの『歌集』は、約20cm (縦) × 約11.5cm (横)、全115頁というきわめてコンパクトで携帯に便利な大きさとなっている。

22) Pestalozzi: *Letters*, S.96.

23) Ebenda.

24) 『リーन्हアルトとゲルトルート』における歌や音楽の場面については、以下の文献において詳細な分析ならびに考察がなされているので、そちらを参照されたい。

参照：河口道朗『近代音楽教育論成立史研究』音楽之友社、1996年、55-65頁。

25) Pestalozzi: *Lienhard und Gertrud*. In: Pestalozzi's *Sämtliche Werke*, Bd.3, S.76.

付記：本稿は、平成13年度科学研究費補助金（奨励研究(A)）の助成を受けた研究成果の一部である。

〈資料〉『歌集』(1811) 所収曲一覧

曲番	作曲者	曲集	曲名 (日本語訳)	歌詞の分類	形態 (節数)
1	?	?	Schön ist die Natur(自然は美しい)	自然	有節歌曲 (4)
2	Engelmann	⑤	Süße, heilige Natur(甘美な, 神聖な自然よ)	〃	〃 (3)
3	Nägeli	①	Natur! Natur!(自然よ! 自然よ!)	〃	〃 (3)
4	Mildheimer	④	Lobt den Herrn!(神をたたえよ!)	宗教	〃 (3)
5	〃	〃	Schön ist es auf Gottes Welt(美は神の世界へ)	〃	〃 (5)
6	〃	〃	Wonne schwebt, lächelt(歓喜が流れ, ほほえむ)	喜び	〃 (6)
7	〃	〃	Geht den Himmel, wie heiter(天へいく, 朗らかに)	宗教	〃 (4)
8	Lindner	③	Wie herrlich leuchtet(すばらしく輝くように)	自然	〃 (5)
9	Mildheimer	④	Der Nachtigal reizende Lieder(サヨナキドリの魅力的な歌)	〃	〃 (4)
10	?	?	Bald ist der Winter(まもなく冬がやっている)	〃	〃 (6)
11	Mildheimer	④	Wohl ist der Herbst(秋であるう)	〃	〃 (8)
12	〃	〃	Der Winter ist ein rechter(冬は正しい…)	〃	〃 (8)
13	Nägeli	②	Im Anfang war's auf Erden(初めは地上にあった)	宗教	Rundgesang (6)
14	?	?	Wie lieblich winkt sie mir (どんなに愛らしく彼女は私にウィンクしたか)	〃	有節歌曲 (4)
15	Nägeli	①	In Morgenroth gekleidet(朝焼けにつつまれて)	自然	〃 (4)
16	(4番の替え歌)		Dankt den Herrn(神に感謝せよ)	宗教	〃 (4)
17	Mildheimer	④	Der Mond ist aufgegangen(月がのぼった)	自然	〃 (7)
18	?	?	Füllest wieder Busch(茂みをふたたび満たす)	〃	〃 (3)
19	Mildheimer	④	In stillen, heitern Glanze(静かな, 聖なる輝きのなかで)	〃	〃 (6)
20	?	?	Schwebe sanft(動きが穏やか…)	〃	〃 (3)
21	Mildheimer	④	Komm, stiller Abend(来たれ, 静かな夕べよ)	〃	〃 (4)
22	Nägeli	①	Bey der stillen Mondeshelle(静かな月明りのもとで)	〃	〃 (3)
23	Mildheimer	④	Gesund, mit frohem Muthe(健康な, 朗らかな勇気を持って)	宗教	〃 (6)
24	〃	〃	Auf und trinkt!(起きよ, そして飲め!)	人生	Rundgesang (5)
25	〃	〃	Freut euch des Lebens(人生を楽しめ)	〃	〃 (7)
26	Engelmann	⑤	Komm, Freude, sei gesegnet(来たれ, 喜びよ, 祝福されよ)	喜び	有節歌曲 (6)
27	Nägeli	②	Kommt, laßt uns fröhlich(来たれ, 我々を楽しませよ)	〃	Rundgesang (8)
28	Mildheimer	④	Stimmt an den frohen(楽しい気分させる…)	〃	有節歌曲 (6)
29	?	?	Laßt uns ihr Brüder(我々を君達の兄弟にさせよ)	愛国	〃 (4)
30	Mildheimer	④	Rosen auf den Weg(道のバラ)	自然	〃 (4)
31	〃	〃	Wer wollte sich mit Grillen(哀愁をもって…望んでいる人は)	宗教	〃 (2)
32	Nägeli	②	Wir sind die Könige(我々は王である)	愛国	Rundgesang (3)
33	Engelmann	⑤	Heil unserm Bunde(我々の連邦万歳)	〃	有節歌曲 (3)
34	Mildheimer	④	Auf, auf ihr Brüder(立て, 立て君達兄弟よ)	〃	〃 (10)
35	Nägeli	①	Auf tapfre Brüder(立て, 勇ましき兄弟よ)	〃	〃 (5)
36	?	?	Frisch auf, Kameraden(元気よく, 仲間達よ)	〃	〃 (6)
37	〃	〃	Schön ist's unter'n freuen Himmel(野外は美しい)	〃	〃 (4)
38	Mildheimer	④	Wenn hier nur kahler Boden(もしここがむき出しの大地ならば)	自然	〃 (5)
39	Nägeli	②	Waldnacht! Jagdlust!(森の夜! 狩りの楽しみ!)	〃	Rundgesang (4)
40	〃	〃	Wer Leib und Geist erhalten will (肉体と精神を得ることを望む人は)	宗教	〃 (3)
41	Mildheimer	④	Wenn jemand eine Reise(もし誰かが旅を…)	自然	〃 (14)
42	〃	〃	Vollendet, Brüder, ist(完成させよ, 兄弟よ)	愛国	有節歌曲 (4)
43	Nägeli	①	Kommt, Schwestern(来たれ, 姉妹よ)	〃	〃 (5)
44	Mildheimer	④	Willst du frei und lustig gehn(君は自由に楽しんでいるかい)	自然	〃 (4)
45	Nägeli	①	Es blüht ein Blümchen(小花が咲いている)	〃	〃 (3)
46	?	?	Es kann ja nicht immer so bleiben (いつもそうあり続けることはできない)	人生	〃 (7)
47	Mildheimer	④	Traurig sehen wir uns an(我々は悲しそうに見える)	悲しみ	〃 (5)
48	?	?	Du gehst aus unserem Kreise(君は我々の輪から出ていく)	別れ	〃 (3)
49	〃	〃	So schließt euch nun(今やそのように君達を結びつける)	愛国	〃 (3)
50	〃	〃	Wie sie so sanft ruh'n(彼らがとても穏やかに休んでいるように)	安らぎ	〃 (4)
51	〃	〃	Wiedersehn, Wort des Trostes(また会いましょう, 慰めの言葉)	別れ	〃 (3)
52	〃	〃	Wenn den langen Weg(もし長い道を)	人生	〃 (4)

曲番	作曲者	曲集	曲名 (日本語訳)	歌詞の分類	形態 (節数)
53	?	?	Traute Heimath(故郷を信じる)	郷愁	有節歌曲 (7)
54	Nägeli	①	Thälchen, sanft dich neigend(小谷よ、穏やかな傾斜の)	自然	// (3)
55	Mildheimer	④	Ich danke Gott(私は神に感謝する)	宗教	// (9)
56	"	"	Ich bin vergnügt, im(私は楽しい)	道徳	// (6)
57	"	"	Ich bin ein Jäger rasch(私は狩人で敏捷だ)	労働	// (3)
58	Engelmann	⑤	Die Morgensterne priesen(朝の星をたたえる)	自然	// (6)
59	(33番の替え歌)		Heil unserm Vater(我々の父をたたえよ)	道徳	// (2)
60	Mildheimer	④	Des Jahres letzte Stunde(その年の最後の時間)	祝い	Rundgesang (6)
61	?	?	Bis ich schlafen werde(私が眠るまで)	宗教	有節歌曲 (5)
62	Lindner	③	Vom hoh'n Olymp herab(高いオリンポスから)	愛国	Rundgesang (4)
63	Mildheimer	④	Bekränzt mit Laub(木の葉で花輪を編む)	//	有節歌曲 (9)
64	?	?	Freude, schöner Götterfunken(歓喜に寄す)	喜び	Rundgesang (6)
65	"	"	Wer reitet so spät(魔王)	物語	有節歌曲 (8)
66	"	"	Sah ein Knab ein Röslein(のぼら)	自然	// (3)
67	Harder	⑥	Wohl ein einsam Röslein stand(ひっそりとバラが咲いていた)	//	// (3)
68	?	?	Es fing ein Knab'(子どもがつかまえた)	道徳	// (3)
69	Mildheimer	④	Nur heck herein(ただうなるだけ)	//	// (6)
70	Harder	⑥	Auf hoher Alp(高いアルプで)	自然	// (6)
71	?	?	Der Sämann freut(種をまく人は喜ぶ)	//	// (9)
72	"	"	Wie ruhest du so stille(君が安らかに休んでいるように)	宗教	// (5)
73	"	"	Meine Chäfchen(私の小さなご主人様)	人間	// (2)
74	"	"	E Btibli lauft(少年は走る)	日常	// (6)
75	"	"	Loset, was i euch will sage (耳を澄まさない、私が君達に言うことに)	時	// (6)
76	"	"	Ne G'sang in Ehre(いいえ、名誉の歌ではありません)	道徳	// (4)
77	"	"	Wohl auf, ihr klein' Waldvögelein (起きよ、君たち小さな森の小鳥達よ)	自然	// (14)
78	Mildheimer	④	Gott grüß euch, Alter(こんにちは、ご老人)	道徳	// (15)
79	?	?	Ei, Knabe, ich will dir(卵、子ども、私は君に望む)	//	// (9)
80	"	"	Dem Vater ein Liedchen(父に小唄を)	喜び	// (2)
81	"	"	Hop, Hop, Hop(ホップ、ホップ、ホップ)	動物	// (3)
82	"	"	Ein Jäger aus Churpfalz(Churpfalz からやって来た狩人)	労働	// (2)
83	"	"	Draußen auf grünester Haid'(外は緑の荒野)	自然	// (5)
84	"	"	Kommt, laßt uns aus spazieren(来たれ、散歩から我々のもとへ)	//	// (2)
85	"	"	Nichts kann auf Erden(地上では何もできない)	//	// (4)
86	"	"	Es wegt die See(海が波うつ)	労働	// (1)
87	Mildheimer	④	Wenn kühl der Morgen(朝が寒い時には)	//	// (2)
88	?	?	Der Tag hat sich(その日は…)	//	// (1)
89	"	"	Ihr Matter, lebt wohl(その草地よ、よく生きよ)	//	// (1)
90	Lindner	③	Es donnern die Höh'n(高地に雷が鳴る)	//	// (2)
91	Mildheimer	④	Hinaus in das Feld(外へ、野原へ)	//	// (2)
92	?	?	Kurze Liedersätze(短い歌)	自然	// (5)
93	"	"	Auf meiner Alp(私のアルプ)	労働	// (1)
94	"	"	Kanon's(カノン)	自然	Kanon (4)

曲集：①=Nägeli : Beilagen zur Gesanglehre.
 ②=Nägeli : Teutonia.
 ③=Lindner : Der musikalische Jugendfreund.
 ④=Mildheimer : Liederbuch.
 ⑤=Engelmann : Der musikalische Kinderfreund.
 ⑥=Harder : Lieder zu Krummacher's "Sonntag".